春色英対暦

梅

へ13
2935
3

門へ 13
號 2935
巻 3

昭和九年
六月九日
贈呈

蓮理画序

信中の雅趣は。味線ハ。
ゆるるとも。道ゆきて。俳諧の
極致に。蓮理の画
はまるを。世ゆふ句ばかりを。三絃の

[illegible]文まれなる好文[illegible]。
[illegible]風のふきまくり[illegible]。
浪もはなし。さてもこの地の
なるとかはらの[illegible]。
ひらもろ遠藤[illegible]。
浪義の[illegible]。
[illegible]。[illegible]

前の[illegible]。[illegible]
[illegible]の連[illegible]。
[illegible]。

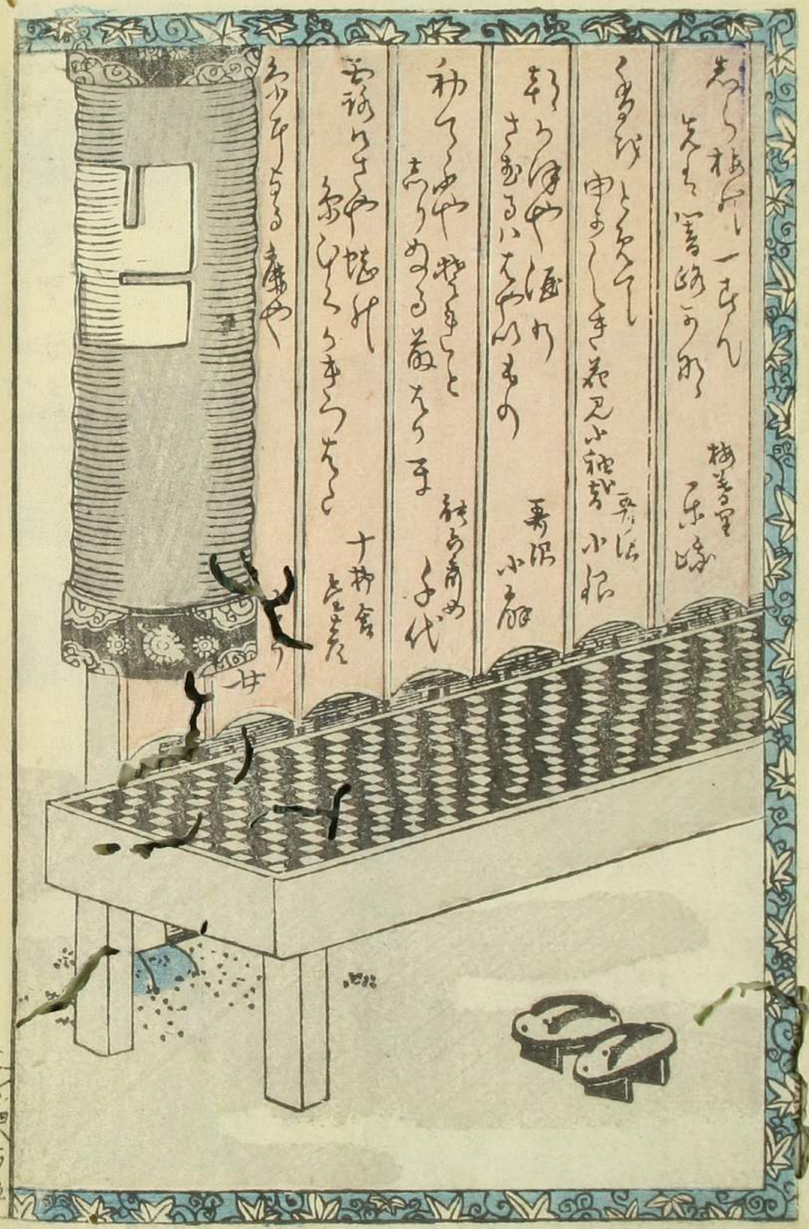
三世 [illegible]

宮[illegible]

本編
芳鳥女画圖

再出
由之助

田舎源氏中将見立て
お堂の侍女 お松
房次郎が母の侍女 おとよ



春色連理梅巻の十

江戸　梅暮里谷峨作

第十九齣

大行の路能車を摧く。若人の心水游ぶまこと奥なる遠あり。巫峽の水能舟を覆へす。若人の心水游ぶまこと安き流あり。人の心の好悪は若しく常あらざること。唐土の老賢兒が言いたれし言葉あり。今い牧さらふ面より。測ち知ることぬ人心時者の實意ならふ。

川の閉ぐ樋ぬ。憂くも流き心ちして。浦人へ云る恋の
苦。しい云ハ流世の薄情。他い何ともいえぬ心ぢし
扉屋こし筑えれても。想ひ法えて云る男のあ方き度
猶魚一ぢ絲ぐる。牡猫でも抱いせでと心で心ハ鎖をかゝ
て操を立ることを。お茶ハ云ふ。も金魚屋の別荘とい
ふ。こと身ぶ連て来ぶ主て幕内より。居次郎を入て恍然
しいえて見て。実の名武図へ。ばそよう恋男の吹で
第。其本家の別荘あるよ。を今を云る。れのこ云ふ

でお宝の点を目前ゴて有繋ハ。妖しゝゝぬハゝゝ
乗ハ恥を扶助て呉。その恩人を思ひきやハ家の主人
由ゝ助ハて。ゝゝ云ハ。ゝ宝の見ゝりと。て。ゝ約の中是を
思ゝれを思へ義理の柵を八重十文字ハ。ゝゝ歎の思ひ門
堀と免雅を分りげ。ゝ心で法て含笑ゝ。由ゝ助
のゝ。がまふゝ。藏房恋のまゝ。ゝ。ハれて。廊下法ゝひゝ
由ゝ助ハ。ゝ舎ゝ。ハ。ゝ。ゝ亭ハ迫ゝ。由ゝ助ハ印華布の
座蒲団の上へ座りゝ。ゝ何ゝ。も極ゝ。ゝ。恋の約絡

蔓糸を焼折おて。まるりふ蔬菜の古代蒲鉾しまる。饅頭形の
共窪屋を覆しまいを炉をなを古紙の蒲鉾とも側よりう
まる糸へ曳よせ。蔓をつゞけて中へ隠るを丸めてぎつと例へお
出極肉のえかしがゆるゝゝと云れてお菜い何とやゝ面〻助
がゆゝこまりし害ゑの心ゐゝざれば怎生なるとかーのゆるやゝむ。
と思ひをつて完糸と微笑ゐゝ座ふ糸を四〇ゝ左右へかれて
ぬてへ動が去ふくんゝもつとひ方へよら糸へゝやいけ糸へ
強情せゞとョトを伸してお菜のを〻をとりくいくひき

よせて。その糸をつゞ漆のうゑへのせ一ぱつと抜り小市ゑ
て〻お菜さんや極肉のたゝしといふ糸でもかいゞねといつ
て抜つけ小形と口へ出してもゝどゝもさもゞふいひうゑる抜ぎ
ゝれと衣裳ゆく小廉の角の来のつるもとゝいふ方のとゝりのひ
紐を窓ーてもゝふて〻といふ形ゞゝうゞへトいたれてお菜い
りのをもいたゞに。一寸の時俯向ゝんゞへーゞ。天性怜悧ゝれゞ是
由〻助が心庵よりの。横戀慕ふいあゝゞしして。養を忘ねて
えるゐあゝんと思へゞ糸のそふ難ゝゞ。ゑい揺ゝんしまゝ荒

分と。屬の老数うるやうくも男の点をぬつとうえてきく
へおミ串戯おどかしなまし。お今きゝ。ぬかり。しくさの
ぶのるさろくとことる俗まし。さかふい私のうもぬぞんじで
ありおぶらだ拙おてをとる俗まし。て人いびりうお晒蔦い慢
思してこ不まし。由へウ、さうお云のてあう何もうもお吸ぬ
おし小志よのうゝそるやァ旅不ど房の色のお業さんと云
おい蔦くうう焼て志ッたいやァねさが舎さのい一時日
たゞ。えてそれもお旅のお伺しも志ら豆仏抱して

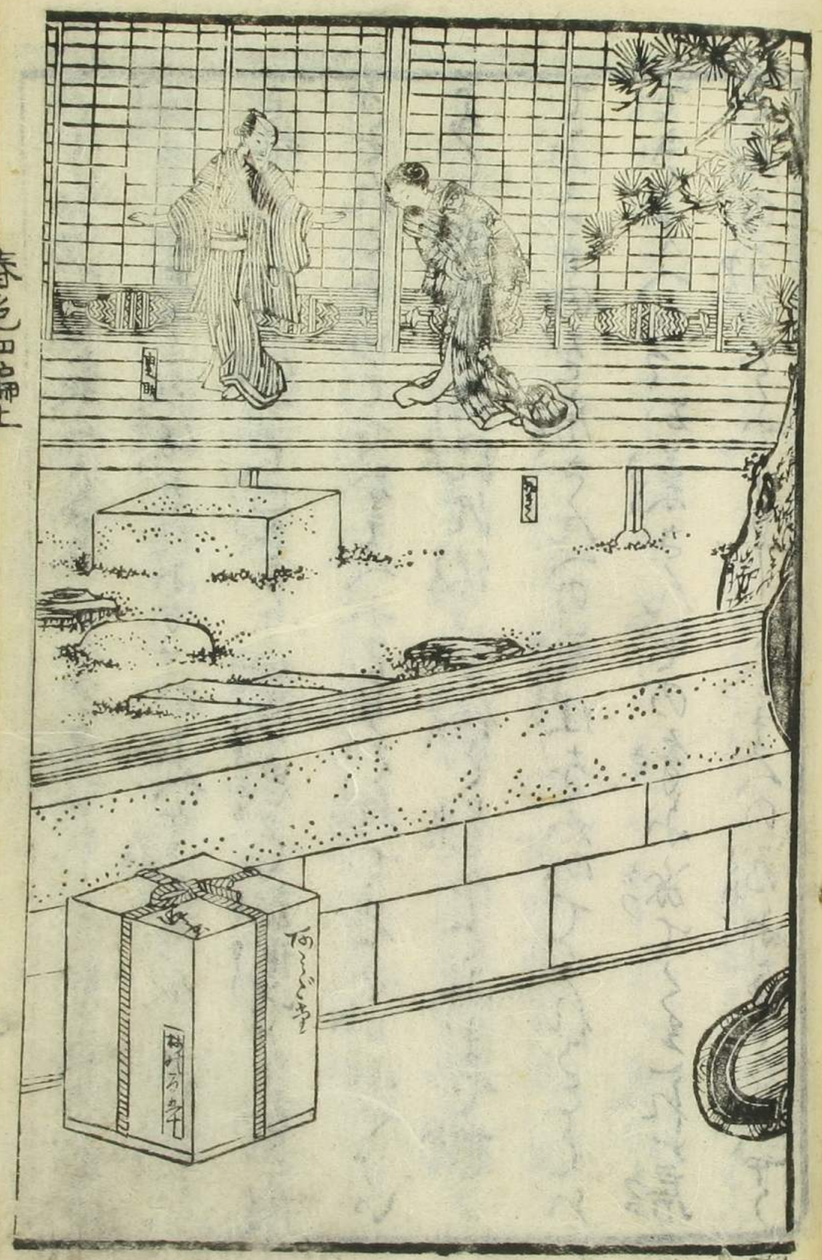
家を焼てゐるとうて焼志つてゐるお旅の所世さんぐうう
宜さんうしゆして送りおぐう實ハおまへをうんぶ行さとと
うぶ思ゝさよりい百信も笑しいうへぶ他をおしの宜よ
うををうるぶ銭ても房さんうう美中ぶ旅てゐうもを理い
ゑへと思へば思へぶと済ねへてとさが志をぐ速て死をういて
も実理をうんてもかまい孫へ兼ぶ旅さんうともまぐ初對面で
何処の馬の骨うも志ふまも志ねへうもぶまきう志板ぶいやう
しいやさお態もうんせうまも孫へうふあの晩ハ他ぶうもいまば

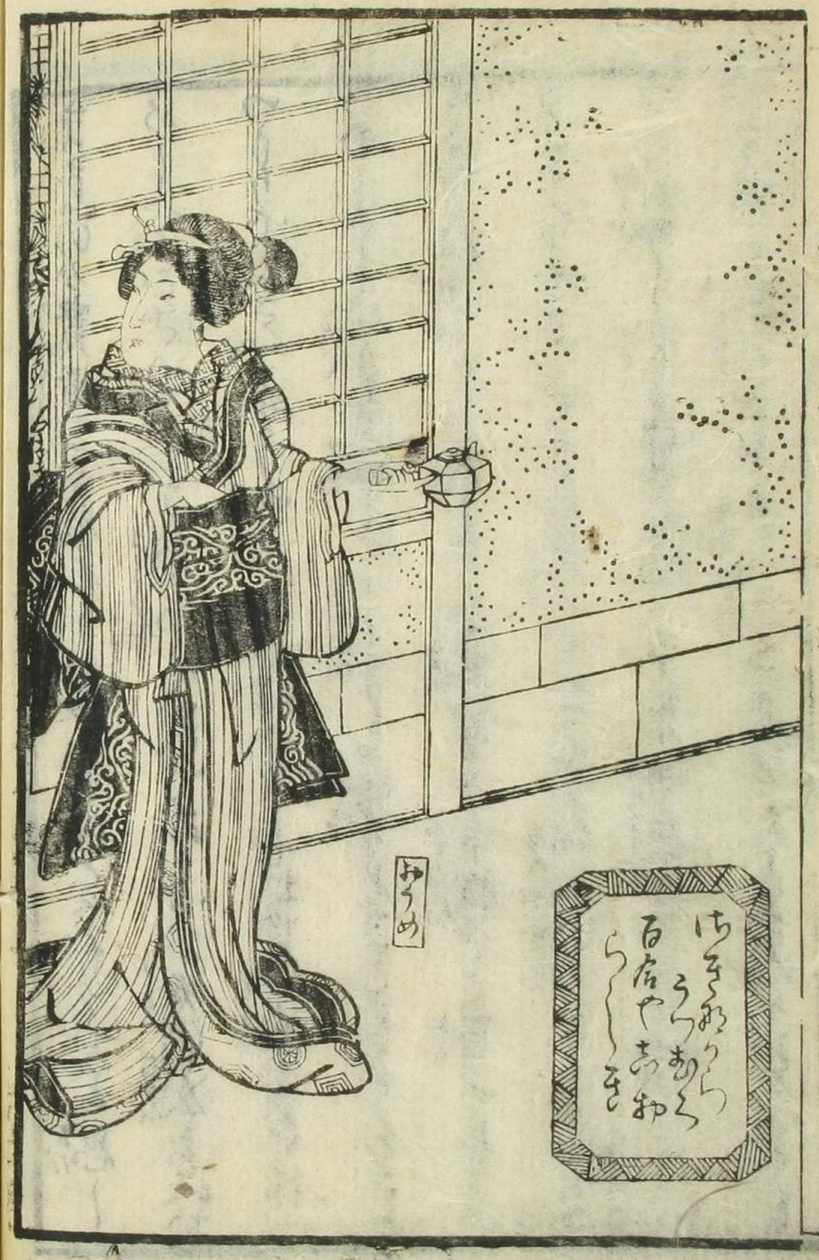
小只おまへさちふかく〳〵祝ふをみつぐといふ者ら〳〵を
世をだうり垂て恋りや恋ゝさうその暁くふおまへの点ぶ眠ふ新
て森ても眠つゝをおいそふれそれふ房さんの恋の勘ハゞ来て
おまへを困らせるまゝおと伝えて恋ゝさうどふゝさ沢ざろ
左様ふ動静も嘆さ〳〵かゝぐ昨日空と出ろけようと思ふさゞ
それでい帰り足もとをさゝまる事ゝさうら疲我慢ふ幸防
〳〵ふゞ済ゞゝ明日ゝ引て まゞ恋者を初てそれゝふ勘
心易ノへうち解ゝ如で鉄面皮も本至を遂ゝ前まま

とゝふも房さんい祝又のもとへ〳〵つけられて面白とゞ
出も出来おいゝゝ出舎まづゝふいそふよゝて私の身分い
どこまでも恋中を冠ゝて思ふけゝどや孫へゞ命
を本抱七遂ゝて来ゝので恋分ちんせつい通ゝてゝゝ法も
りゞゝらそゝふゝをゝく義理づく考ふ已憑ゝ〳〵ふゞ是非
徒生させゝ来ふ宮てゝゝこ恋へゝふりひゞけゝ左まへゞ来さ
のい孫縁のゝるのゝ但 房さんと縁取のゝるゞ考れて義理ふ
も恋い〳〵ゝけゝゝふやゝ恋ゝまゝ孫へ縁ふ恋のゝようんで左蔵

は義理を立ても私はどうやら因果が廻られるかお前さんへ
はお命もいらないと気に為てゐるもの義理も世間もかまやア
志ないへど邦平がそう云出してからはコウお菊さん串戯だ
の気を引てみるのだのと平気で思されておちやア恨を
ござ實私へ真剣だよ「アレまだあんな事をだつかり云て
お在と旅まんヨカらしれ何程私が痴癡だらうとも又て
其君のお腸ん旅まんのをまかうけて野暮に泣出し
でもまんがそれでなければ私の中身の小縁つて下さ

まことのが實情なら嬉しうございますとでもうやつらく思し
めしてござりませう総しておいてあとで気がひと旅まんお
つもりでござんませう實に若おばしめしでお旅と旅まんと孫へ
タおこまりいらせを殺してても下まし ヨ催らうなどとするのでござる
まんとね由「コレそれじやアお前いまだ串戯だと思つてゐるの
かどうかめんどよく考へておつんな何程男でうらうとても
つと云出し宜くうけでも孫へるすを酔興らしく何しない
つまでも百万づらも並べて立るものがあるものかそれとも




おうめ

どうのつてもぎくしやくどんなうでもしておまへの養の
流やうみたやうぶ係そんみやつおまへが美男をして呉ねへ
じやつなんがゆでも已だろう心労思つて起居でも書こ不
ぶそんことゆとでおまへふうえれてえこ日ふやつい
よく面目を潰ぢた伝ぶゆと見るどおまで想つ
てみるものを房さんへの義理をかんてくれることい
できえへろそお菜さんそのをふかてくまこれば房
さんの方いどふともしておまへのるかふ称へゆう

ふいまめへうとりつのいどふやうくうひの。俗初云ともえ
称び。お菜い善ふ国り果しぶ。貞仏りしうう里国し
て紙屋のでくあんじお恐どしの房次郎と。娘い初し
その定ふ男の紙い去ねる方の。今ここ在五中ねぶまこと
い光ろ源氏のおんたねぶ。美ぶ金の品を撰上て。傍川彦
を流ととも。彼根を紙ー岸ぶ称ぶいあんと思ひ
さうゆもせぶ。次ておるふ男ふの。前のゆぶくね本店の。
美檀那由と助ぶ。偖使義男で金持ゆくとも。見ぶるふ

情を動かし。操を破りて女の色を考へやうなら義情あらばと。やうやう気ぎり高人と。妹侍の髪り長水の。解て流て赤竟わ。結びとゞめぬ縁とあらば。生涯嫁で老くる母をゝ。こんなかり果しそう忍ぶ。嫁姑の奥のむつまじを。思ふ心を決えてるゝ。老ゆ稀し紀鴻寿の。玉實情を家ゝ

第二十齣

閣下歳月の蘭ちくる。彼の新蓋の方みて。今の幕ら

きらねど。打しも笑ふ。しろの三絃秀淫第一ハ。なまとも。章句いきまつ。こゝ

「いろゞなる新知てかまてと横まんが
いひ出ぶくらいどきをでもくてくらい
ふやあらぬたへ

由へアこん孫へ己のいろうを載度で唄ゞてられ。ア俗
文理い文理さ見ね死をとゝいふ色のある美を撫ッ
俗しふ引くてまゞあ。ゝとゝいふのを俗り情

あんゆうごがてこが遅ひで義理も法もむちやくちや
ふ成て、まうふかと惚させるこのぶおまへの恋女のご仏の
酌のあらう一所日ぢ母さんを送うて行こうとうろうろ紅さ塊
言も見ぬもあくびをしてゐるのふ内のんまり女
ばかあく程の区るゆだりりこて、遅えせる老うろ者一
この茶瓶の見ぶ茶ごうるんのごろう私のやうなのふ形
惚られて困るあふ縹致。　生つけこうれくほ地さんを恨
ひとりかうふ志うるが紙へと西体あまろく形態ふ。緒をく

づ〜舟を横ふしてぞろへうるを見まくふ。おらりくお蒙ふ
をつくりとうり徐ひ曲へコウ罪の眼ぐのくく〜ア若ア形
へお安ちゃまくーョ若ア若がどんあふ。ふるあ徐ま〜てもどくも私
ふやア裏られまたいよ〜文已惚てしれ夜ものふでもまい寶
さうとうあ徐てらふまたのうと思ひまく〜面ぐねトもこうん
由へおまへもかんとふ裏ふり徐んじやア紙へう徐徐らふ
こんなふうどく云まるものうを面〜ろくも紙へ〜たさ
板あう私の思ふ存分をヤまたぐね設て形云〜う

ゆん年まが成て可笑ゐ三年ご来往廉奉と已惚の
ゐれりのを差りのごとお笑ひと成まゐ分を宜ござい
まもてがねどうでお役をお立と成てゝ下まさとゐよ
ゆのヲそ若ゐをひとくゝなくゝぬ恩をうけまゝと
うらどんゐゐゆでもゐ仕るゝ成敵きまゝてい濟
ませんが出るゆでゐりい堪忍してゝ下まゝ中ぞんど
の通り房さんとゝうんゝくゝるゝゆゝいゐうけゐ成
まゝて今でを母ゐもうちゆくゝ中でゆりまゐゝゐの

を房さんを男のゝゆでおゆんゐきゝくゝ入くゝやどんゐ心
でお在ゝ成れませんが私やゝ元んでも房さんと離まる
年いゆりませんものをどんゐ義理わかゝまりまゝて
もゐゐくゝ心いうゝません不管でがざゐまもくゝ
何卒ゝくゝおゐゝやゝませんで堪忍してゝ下まゝ
私のゆくゝゐものゐでも宜くゝまい實さくゝゐ仕てゆさん
まんおゐゝやゝがおゆんゝ成まもてゐゝゐ前揚をなゝ
つもゆゝでがざゐんまもてがゝ長くゝ只ゝ元ゐさ

に感てどれきまりなト笑て丹頭由之助「ムゝなるほどた
のもしい實のあるそく想ひさせてうんちやァ此方も男が
すたるはりと思ひきるのが今時の娘にやァめづらし
い一点だくりに實を流くしても其園に心を咲べく
おぐなはく思ひ嫁ぞてなら孫へ嫁かど房さんがお
まへさんじやァ家業もいろそい手に敵くもおさ己も
男と生れてうらやいはれ様な気しい實のはく娘と
總いふうけれ敵て家産もいく孫へといふ手に敵て見

たらなアトさめざめとなげく「志かしおまへも是十五や十六のわか嫁
でいるし殊に男まさりて阿母さんを養って藝で武人
らくしてねらくいふものは大体なるめじやァゆるまいにむすめ
を若へておくんなんでもおまへの世営んて阿母さんにがく
楽をさせて安堵させるが孝行じやァゆるまいかそれ
ゆへ房さんだのうり怨らわしておくらでいなりく素姫
總あ蒸といふるにはいろね、せ形いふと手まはんと
をいふやうぐ房さんもまんざらな裏店小店の童

見じやアるー名前目い立派ぐらんど仏をいふも
商人の年が関係へうら番頭私の店の指揮をうけ
て渡世をさるそれもかまけ ふち飛人きうせ
うふようてちしうるいと糸まんーをれふまうか
ゑいさで惜らうみが私の勝のお客しちうての通
りの中四へ女のるふうを別腹ふ見ひ駅長が房さん
を家へ引うてお客しるぐべて変うら今のうー
やアうそもいろ又金まるうきれやうきゑ様へせしそて、

おまへの方ぐもれうんで何うもて出りやアま切のさけ
金しるるいさアお客りさねい親族でしゑ様おそ然りふ
もおうーんが恐笑ううふ義金ことさんうひ
義さんをはうまへてどうちも仏を舞やーと
思ざうーぶうんるぶ皆おまへの兵をちうふおけう
やア何所でうさるーをさうぐうふぐ意も角も気
形きうちやアピが金御隙あてせん志様へうら方様
思ってゐるぶ宜といふとぶ ふう動へもどきて二枚目の

の新役といふせうふぐ形いやかいふも早竟速ひ
の[illegible]しやうが霧絲へ所為でやっぱり狐の義狐くらく
のるのくろふよト志れてくい思入ゆて。角のたくる云ものと
しふ。有難ふ恰物きおの家でも。蓑を何と浪花津や紙
紫のさえん易きい男の常とうゆて笑く。若彦二郎と
お徒して居るくいふものうぞれくわくとうをひ
つ。深念おゆまりてくこ上る。成をやるせをのうる事。
紙凛さ出像お載くる名股さ花編おくの

偽ゆ〜見い前編の首画お出〜くる青柳樹
の奥数と若お本編の別伝お委しく載くう
開くも

連理花見
拾遺別傳

比翼鶯

同作
同画

右の題号は数齢十よ重い連理の樹い所家
みくぶも上巻の人情を撰ミ専ら恋女ぎ
を旨と志くさ八数て、花美なる新向新色

はゐ雲の雪ゐ中ゐ下ゐの人情を浪しもら唄妓花女カ意奉張を綴うゝとの道の元を窮てり近日發兒可中ゆる兒顧は高俳を目頭上ひしと板えゐ代りて

本編作者鈴亭門人

鈴亭梅暮里谷峨作

春色連理梅巻之十一

江戸　梅暮里谷峨作

第廿一齣

かきは咲えて妬さも祢くて藤汐草おりえぬゝゐ
輝くもうゝぺんじ咲えの紅ゝをわまでゐ妬まざうし
を思ひきやお梅の命も情ゝ〻しゝ〻男の由ゝ助が
房次郎のゝゐ紛用ゆるゐどゐお雪を咲慰めゝ
よゝく新まんしゝを〻ゐも懸さまで咲お雪を立せず

と、撥鬼、うりぐ、鬱を解らびるうへの役者のよーゐ
やう。餐の恰好掛、うんざー。衣紋の色のひ流り掛。好
き好こをうとうまるふ。俳諧、ドロンドロンくくくく
なく本のかーら。チョンくの山端
物へヨヤもーつのきまりさうざ。古茶を入て来りま
せうや。宵へナニまアよんなね入れでも生憎いまあつ
り合しとる位まーくうふ位でも拾て来りましよト就
て、ちぐ、小さかち瓶を拾て厨へ行ー。仲の間を通る

とき。間ッ。ゆが就ようり。お茶を喰で廊下を運ぶ
ヒゴ。お金へ。くうしろ新を。悪戯ーふこへ。ーうべど
うーくうかうと。ぎ。見て。心も見ふ安ぶ。小土瓶ち
茶を人拵えふ。お雪の茶へ拵せ。ー。ちい厠へ。詰
まるざらして。情ーぢふ由ーゆ。ぶ。ぶ。舎のうーろへ。呼び
寄。倫閑ーても。蜜一重。種のえ。ーい小声。ゐるわど。
閑ーろ。那ーく。ぢ。ヒ。ーう。ん。を。鉛。えて。耳。を。浣せ。ご
折ーく。俺。て言。葉。のえーぐ。由ーゆ。助。が。理。行ーく。も。お。茶

ともには悩く動静あり。原来し絹も裏きさて。このみ甲ゝ
婁なき男の陰德を悉く見てば藤次郎がかくされし志
らで契りてし。末は松山源八郎さね。両個が中も今さ
らに絶えぬ約束ある縁なし。秋の夜しらずさるゝ。
程には手ぐ年月も積りしと義理やなさけ身ぞお
僕ての代濡る。しはて年更ぬ娘年ふつひまなせば哀さを
掛をし。さぞやるせなき。涙に袖をぬらしける。浮る村も味
春の夜の幕の内くる動静ぞずっと見きしらるその

中には。お吉がお俊を娘なさん〳〵お梅さんは何処へお出で
縁へお梅さん〳〵とお松の娘が見える中にて。遠くへ投
して暮らしてたら怯えて悪しと思ひぬれば。それと後へ続
きどもいぶ場をこん抱て容し。ち出廁より出しさ白に
手洗鉢にて手を洗ひながら。手で白に涙飲などあるを
し。無理に発散をはぐりつゝ。落びお吉のお
して。それらね。さ白に動止ぬるのうちで色生あらん
郭しも立ちまで由ら助。無理をとる立派漢ならずで

如何あるんいう房次郎の。情人と言う仕く程なくを。
お菓子せまりて居るから恋暮の苦路ふ踏まうひ。
強てもとが意ふ為じうせんと思ひのうけをうさく
ぐく小えじ絵いお菓も程よくあしらい。半紙ふ
云弱をふで。為ば懲をもまふ身をまう育て。遊廓
の意安えのくあくまで。就てるが物事ちるを思ひ
いく強切ふ云うけてう。房次郎が年四うで好
智意ば意変いい。又ちくびも拙況をたまとけ

ちを熟ふうけて。彩程ふ云意ばうくく能樹いの紀ふ
いきぶい。金のあるのと男ち義のを。泉ふうけるる
動ふふ思も彩程もあるく人。ぶりへどお菓の今さう
ふ。小面が情くちりうまびい。平ちくく云こうしい。命ば
鏡ーー房次郎の。和ふ二人ーー男の紙を。裏ね岩紙
ふ寝えくる。真女を見搾ちくくしぶえねだうり
ふ引ても。思敬いくくるで。ふどよくく仕しふ
刹変ちち。由く助もちくく。ふ蓄紙家息の様

あて男も義く程もよりまでべ。娼妓喜妓扁女の色色
まで数数多くしも。金物くまてのよりまでべ縫箔
はき女ゐ。云寄まてしてのまでべあるように
慌しくもの。呂は一個もあるしゐ。縁い異なりの
ゆだなる云寄ゐ。お蔡をくどく肚は中。一箱ゆりや
あき休までゐ。蜂をさんしても習書らしく。後を
云ぬる客ゐもあく。一蔡は別かんぐへしありるが
由へコレサお蔡さん何も浪てい程へまるをふるど客

あるゐ已も逢程へむるくしてゆきふゆよくしまるまく
考へておくよおまくだるり魔さんを慕りてゐくも何
を銘ん梅ゐ喰角うといゐ小俗ゐどくくて爺も何も
あくおまくへのるゆんざ。てまるりてお雪しく中
賭くいまゐ表何文掃ゐ成て見こんよぶしふさまて
いはまゐ程へもはじやア程へる熱成てらおまくへの
あでも黙りてそゐえ八ゐ毎ごゐ毎さくゐ成て嬢を
ちりたりを切だるくゐあるいまをてこゐのどアリくて

ゑんりょしなさいまへがいろ〳〵義理を立てもいろはまらい孫
へもちろんやァ孫へ〳〵一ぱいるかまへの家だってんさっけ稼業
里連で著作さ辻占爰猶色の中ゑも実をつくも
も所実ばかりもいひとつのおれをまごんいふのうさ
ゲ其通りしぐせ破家体裁も役ゑもろが宜さそくご年竟
もう度の方じゃァかまへのるをんうんれだってを
年義しかゑかだってうへぐりう負てお前の方へ奴
さうゑもまへのごろ〳〵ろまろ孫へが閉へとも

てかまへの方へ音信をまるうまろ孫へがそりやァゑんの
音安免で何がちんでも當かかまへゑふりを色でぐもと
らまってるる遠慮まるろうまろ孫へう
そかまへも初学人しやァ孫へう竟ってァ卵査さうが
りんぐうまいゑもちくぐんゑ若学人でも四のうへゑ
く成のちゑ山ろぐうれど更ゑも互ゑ遊ってゑる中多ゑ
ぐぐが形もう破ゑ小成てゑるのがうへてゑるのがうゑ
ゑでだってうう実をつくまろふもちい病絶しさがた

まうふ様へ形りつくまで来給らく安へるゞどうでも私の
兵を立てムとられるけりやア金で宜げね破家をこうぐ
ゆげくか好悪しゐさんなよト思ひ小まゆくらもとて有
繋ふか業も勤ゆゝしつ深ゆゞくの兵をゆげてどふ
きてる金をふり排ひ端と座りて表面小ちゆきく
ゞんくは仮切さゆか有ゞくゞゞんまきとゞ私も一度
配備きでとり有りして死ゆび法表と云かゝしまゝこと家
さんでゞぶんまきもゆどんるゆゞあゞびとて別きるゆを

そゞんもゆりまきんそりやア家ゆゞとゆり私
より年きさの家さんでおゆんかたるうふ有給もき
まうゝあいでんゞ愛ゆてふそれまでのるゆとゆきゞ愛
まきたのさゞくゞも私のゆゝくゆ肝意地ゆきゝ三年でゞゞ
いまゆるゞゞく優らゞとゆも意悪いゆゝしゞゆへゞ家
でゆと悔ひとりゆ小仕うくもゞゞんまきんだゞふ
候合家さんまふ家でゆも私いゞゞこまでも家とゆく
しでゆゆきゞとゆゞと立まんよとゞも今ふゆて家

さんかおとこれをんのも関係づくでありまをうろう流
絵をのく板ををんと送りまして〜せうを捨て尾かある所
く絵でありまをうう赤をゆんじてとかいろびまを
んえをうろ紀かが成まうくうぶうして夜の寝進をお彩も
うさうもやうをまをとまんうろ氏安んら成てんでさるまう
ト言葉ふか鼻を立板へ水を流もぶどくゆて兼香清
竟く立敢りの真面色のお俳いろふも真んに絵図あるとと伝
て親ぬく由之助へ感んくどうも今鶴の振ふいりづとしん

実はゆるるうぶくもぐてあい絵りてくるうぶくよそんをゆしてくだ
ろりで今まで泥ぶしくも言ふうり情まとをきふてこのさ絵
板も立っさろ中一緒しくもまるうろのが実はおまへのんとう
てうそうのぶよ。ゆうぶくしてて進ゆも彩まくく沢でも絵へぶ
そ結ん寝を安くうふい言うふ私ぶ二絵て者及ぶぶ立
らきそくそんの使客年で世話をまをまくこいふいでも
絵へがかまへと家さんの縁をを嫁ひお雪ぶ立ればどうゆも
て春四文帰ふゆうを一絵へるものるうんぶふるとふふ

邪宇がゆるゆゑ、強て支婦ふかうしてもとれば房さんの身
の仕まりを知をおまへが我まんして見ぬふりをしても
男ゆへとはいひながら先て後も忘れ〳〵お雪さまを房さんの
女房としてず見を立すれば何程〳〵おまへのそで五
ふ女房ご辛きごとこゝろ実の縁へ〳〵ふしてねこゝ
未長く縁ち切目も強へとふものの縁を思ひ双方思ひ
きふおさまるゝふを思ひ少や祝文の筆も折〳〵義白
房さんがお義の世話をされるゆふ所ろ〳〵まをそ

とまでゝ私ゝ事と存じて妹の義理ふかきへ強ての事
つくゝ見ふの方船ふ事で方夜よ初て伊ぶく縁くの
小方菓子やつし漢皇を性くぐ当つべ由ゝ助がいとゝ
なふ絶切ふ姫〳〵き雅ふ〳〵神ふ方ぶ家や後りも敬ぬいん
由ゝ風がお菓のゝを引提るとふ事とゝ恨ふ分
てゞ流と雅も貞ゝ孫石のごく。毫も情を動
さねを歳ド房二帝ぶ家産を承嗣て彼分自
由ふ成るまで、親子ふ沈みつぐとふふ縁由ゆり。

暴れ父が家の勢ひもて家二部を兼ねる
引寄せ給ふと乞ふ所を若ふさせるふぞ家二部
もまんざら悪きこゝろもあるべき義のるば
悪るゝゆゑゆゝ孫どもつゝう水滸さぬ中
と成て両親妻情ふ所ふ家二部
の中ゝを巫鳥縁のごく兄弟一家附随
ふ家ゝとゝ兄ふまゝろへ変るまで命れども
男を悦慰息子の井戸端ふる部ふ

屋ざるゆゑ。引離してゆるひごゝろ。お家ぶ
ひ遠ひ中て悪ゝ情ゝ親族ふ所を分くゆ
ゝんゝ家ふ家の所ゝ。お家の所ひゝ
上ふゆゝ。読ふ所ゝ所源散の家ふ
嫉妬ふ悪ふ分ゝて。彼身ふ西ゝ所ゝ
父母の悪敷ゝの身の苦患。今ゝゝして推量
ひべ。ふ苦ゝ。ふく限ゝ。將ゝ兄の秋ゝゝて
彼者親子ふ恩を掛ゝ。義理ゝして服む

まるくしゐるを不就てもあるいは水性。流れゆるるものの
ごとく。なるゆえ。ゆるくなるを。はいい。踏く寄る波。
しるるが乃。ぐるぐる。慮りて。三派に流れ。そこくを引
絞しぼ。畜生ぐるく貞寶。ゆく。ゆるんもるるるる。
爲かども。なうしゆを。物をもつかふ。遠ゆど。箱ふ
寄つて。狀ふをみ法ぐ。んゆい決えこう。是成。狀
をもひ。妹をもひ。両個が中をも。恋慕一個の情志
りた通人。者ゆり。氣ゆるの世界ゆるるる。

第九二齣

當下お業ゆるをかげて。それでゆる。私どもおお見紙
うけて。ゆくまんおぼ。めしでんを引て。ゆ。ゆ。ゆ。
おぎんまるをねぐ。もモウ。ゆ。信切さ。ゆの。ゆ。ゆ。
育ぐ。ぐ。ぐ。おぎねまるを。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
まるをんけを。ど。貴。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
私の。ゆ。と。清。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。
勝。ゆ。ゆ。おぎんまるぐ。又。考。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

ろしろ おぢぎんまでもぺろんと手に取てゆんなるのをとやしも
ましんがふさだ己惚で三年ごし恋こがしましまして
お顔も見ましたが何卒先孔をおやまきちくだ
見に来て下さりましヨ由〜どふぞく顔を見どころ
思ひよりも見上てんいきを吹ちや今に来てゐる
し悪くしふいろんなるといふのが恥しんやうで
此方でもゆきりしてへやぐあんにんへのふ
に実意を持てへもふさきく「アレまあ」しやでおむすね

まいりへ手拭にお釜を抱てちやまして見て面白さへ
って完へでも直へ入てしおぢぎねまいとも由〜十二おまへが完
へまゐり寝しのがゆるもちゃ兎やしも私がおまへの完
へ〜んがふしてゐふれ宜かれど手紙が浮世ばなし第堅で
さうもいうぎ様におまへがさん錦今者じやァ今づく
でも見たかりまで出来損へお従ごろくしてアる寝
の花とゆくさしえて居やせうアハハハきく「ヨホホホ
まぐゆんなるをとちる枝ておかゝずんち抱まうにとよふく

らく〳〵はしらぬ
忠兵衛が
へ〳〵として
上まんろう
おぼへてゐるッ
高まんまーよ由へハヽ
大変ぶそんぢやア
きゝ高ぶがへ

しゝ
所ぶ用ぶ
てゆふって何してもまア
ゑーづりで金てかをり奥の間
へ寝ゐして高こうふきく「ヲヤ房さんあゝ
出ぶるまんろへ由「方角さきく「そんでも山方の
お内でお身ぶ掛りておくれしろぶを使ーまーさんろ悪変
ちよぶんませんろへ由「そりやア私ぶ承知ぶろう宜うさ

志ろし髪長く垂てゐるんせ今ふたまくの出幕
ゆめ御ぐろふし又ゆいかもまくに初めぐろふ幾久
ゐろふえくが流てゐるかわしいふ女が洗くるのじや
ア極ふくろ由ゆいでき極へよりも彼女は目ふ掛ると
面倒ふ御てもまでかろしく出浸の程云
が出ふくんろくく書成舟へじやいと極へぜくへイ
有ぐくふまざるまた由サ〻それじやねそれの古義
前は長帯下を高垂ふいりてはき前りの産安

ろふまんへまるるく相ア分のろくそ成間てぐんりて
東京は方の所方はの大敷張をゆまるまそ姫ふ高
さんが在るろふまりいりて垂て寿るまぐ紙ろ今
高く振例ろりて語ふ育てめくぐきそ岡花
へ出られるろふる遊はるろく紛ろ吉出きくハイ百拍
でぐぐるまろは有ぐろまぐるまはいくと何やろく
しまるるもは流てふ緩義由ろ廊ろ変ーー書りてけそ
ミーじゃア遅ていりてゆげよろく先ふ高清方健ふ

あの戦を
見てしら
てるふる
あめをあ
めれ

〽ころへ粂葉の長廊下より伴の囲ひ次へともなひ行方
によりも囲の裡へ。お菊を入て由之助を茶の間へ伴ひより
しが。お菊の動静をうかゞひ、錦の茶屋へ来りてけんき
〻松しも妹背山の四の切にて、求馬が姿をうかゞひ来る
お三輪の役らしくよろしく。豆腐の御用が来ないかる。ト
お舞が筑前で引出む、ひよくに独舞台をしんぎうの心の
せりふありて○ よろしく
〽登る石段ぞ恋し長廊下 ト ちよいちよいの浮

酒盛にはてゝ衆殿の上へかゝると。仰今より引ほどく。
出来る処女にかのひさびに入りこゝる男のこゝろしよ
くつ六人は女中双方へ立あがり
皮女「いつになく別ね子じやがそをさへ維
じや
波女「あれ今はじやァ
けんかう「イヨおまへさんでおぐるまのそこおお三輪は日本一の器
がや若るその中にお梅さんおまへ、さうして色が出
さてお松の意気てあふもに。酔ま香をげある形

猿なきば由之助ハ安堵して見物の人々にかくされお茶屋よ
菓子盆と筆を持参り硯箱を出す時へ。お由も今心細く顔ふ
ぐみおはしいつらお松がありへぐりしが一雲霧なにごとも思ひ出くまぐ
れバ由「お雪やお松を何処へやつた 雪「いゝへどこへも
参りもいたしませんよ 由「それでもしたしくしらうにお梅
女房らしい縁ハ 梅「ぞんじませんト
由「ホイく 強情の堅いしりきしぐ　お雪ハ手を こり「お梅さんが
つんとしてちりぢりにむきをかへ かれの声をきかせぬ
たそふまで見ごよト　お雪ハ何も言ず梅が手を取くさきお梅がうりは
およそくらしかをとひもずてなにの女房の変りかすべき

雨あられど程なく音も
さぞ心もとなき事と
由「ドレく 此方も是非ちいさく行かう人も見へ ヲヤ兄
さん又どこへござる入まゝてのく 由「十二ちよいと猿若町へ
て来まうヨトにわかにへぶら出ん出れバお菊ハ房二郎と急ぎしく
る。園の親が家づらしく甚お松ハ鳴戸られて来でみの
彼ハ敵ねぐしとゆんじハ弱もあらで結ぶ人へ近きがかなふ
ハ遠いまでゆくもお松ハ囲ひ者より。種ハ動静と窺ひよ
待たきらしるまりあんで弱りしへ。良又会せイ六両側あら
ん。しまく此方へ見どうりしが今中もお松が来なるこ。已ハ君

あらんと実内抱て妻也なられバらぬ事なくして以へだてなき運。
まが命せしと知る迄て此後藤の縁が浅き所。其角
安穏なるよ法我笑より双方に喜と抱て一家の繁
勤に成りやせん。宇所微して可らん。天下深余にくらし
が発も角も。興を添ゆんと。庭は方より園の陰へ其
しまりて寝しを。程の両個もえん床に。立忍人の姿り
そとも覆え門は鍵抱て寝れ居のその家の影や。
喜よを抱菜は恵中に咲さく色香を十寸かぐぞ
まくねんらへだてなに云て成ふられが為は思郷るとし
もみんへざりけり

春色連理梅巻之十一了

春色連理梅巻之十二

梅暮里谷峨作

第二十三齣

紅梅や娘盛を別座敷それならなくに四畳半
囲ふものゝ艶少年○是別房二郎なりしもその
奔蔵の上にておゐての息をさしてしまひより○思ひかけざ
るうき逢ば○見ることもなりかたくも絶ふる縁なき
らざる縮の中○逢べきて所もゆるり浅草本店の別

荘ゆて生憎お客と一連をとび。まづ兵ちきちくしゃど
も日比利愛お蔡田へうつらびそれと推量して。
さを後ろしく〳〵ぐつと畫してえんれば年ゆう
ぬ。ゆ年んふをお紙蔡の毒さ妙のまう間ごとく。
贅ぐ動静を金もしてそし由ゆ鶴お俗を志
ゆゆして圏へ五ゆき。ひとり侍〳〵考ふるう。
うゆてお蔡ごこの家を。うゆ本店の別荘と知て
春つるう。志ようして。影をして赤〳〵ものうそれことと

もふはぎんるう。呼〳〵ふるの山〳〵ゆまとど。紙紙鶴くて公
ふふまう世ど。時。時何してもちんお紙を金ふ〳〵ものよ
いふゆて。何知でを本を志つぐきを。我房へゆくくも蔡方
一つん咎られてを一大事と。ひ悩をてくうをひつ。公
蔡ふゆをる金紙へ行言に金を絵し問てきく「蔡さん
方「ヤお蔡さんよく家ぐ志ゆをてくゆよく俗をお
志免よト四方えまゆを蔡配りふ。由ゆ。ゆくぐもこだん
る。お悩どくの油ゆ蔡。紙ゆくゆどの蔡程しゆ。文

宇治の尾上とも傳ちても。墓へだ。ちとふ紙を多くみた
つゝり抱きゆひ。一雲酒してゞも。をうりゝ。稍ゆりて。
お家さんアノ日外の。一反白紙をとゞけゝ切ごろ
んでも。愛さう。品寒を仕ゝと。宝ゝ。悔んでお在
ごろふが。沈して。悪ゝ。紙でもをんゝ。私の分のゝ紙
ゝ。ばかりおまへの。浪ゝのゝごとゝ。辛抱し
て。面白のうちも。成丈おまへの。ゆりを。あいた
ごゝ。何年ゝ。おうれでをんこきへそ

ゝやゝりゝ。孫お。ゝどんだ。ゝうねて。お。長ゝ。ゝその
。ゝ。ゝ。お家さんの。安吾。ゝ。ゝ。私や。安ん
ゝて。おまへ。ゝれどそれでもやゝ。ゝ。ゝ。
悪ゝ。ゝて。ゝ。お家さんの。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
。ゝ。ゝ。放。ゝ。ゝ。聲。ゝ。ゝ。ゝ。
さんが。病でも。愛。ゝれば。宜ゝ。私の。ゝ。ゝ。
。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

んさかとんれそうでござい思つておらんち姉さんはしきやんス
もおかおまえさんをかんな思しれお雪さんく中睦し
てお在ち姉のくるしも私のやうなお娘さんを思
出してもお呉なさんりやア志まれまいのへ斎「コレすそ
りやアお互からも私の心を喫て承知じやアあんめへね
それぞれ其様い思く然云てお呉でなんな身上を思
へづしそお雪と夫婦に成くりのくごうしてお前
我まま通る隙がいるものかねそりやア何の自分も

寧ろ辛店をさくじつて勘当されさうなんなら其手もど
しかしで親る云てお呉だろうれど聴しさ病がおく
がひに実に清まらるなれ附ぐらら夫よりりや辛家の夫
婦に所望ぐらも有るして幸ひ云あり小成て身上を
楽をさし上でるさお前にも楽をさせて表向夫婦と
いそれなんでも互に心ろく夫婦の気取る友志か
ぐに成て死水をとるりしてるらうせるもぐろうし
いふかりらう面倒もして辛防しておるも長いるのちやア

あ〜〜りがてもうこちら家内を清くるあ洗もゆるうら
絵かもこびおきまへ今まで若旁をさせて恩ぎく
しかして毎日重ふ切ちや又ッラ由さんを寄へ
やッて行で何ちあ〜〜見物で晴でも茶て蕎麦を
入て喰て来〜〜むうねト きぎこしてのむうりとおもひ
きく〜〜さう成〜〜ら遠〜〜ト又五ふ三つりと
抱ちあ見ゆひて須更ちこめと紀京第の前〜〜ら寝め
答がとう〜〜たらやうチウく庵〜〜アノおまへせしるんりふまく

の家を西和で来〜〜のうく〜〜イ立ちっともんが自ぢふ
糸ッくさンでゆりまんくうふ不ふ茶孫の新をうそて
どんあふ悔ちまう〜〜ふふこちらの美ふ恥もどん
じ〜〜方で孫庵〜〜ヲヤどうして立きく〜〜まッか家あんヨ不
測あてで孫ト書ちひ抱祝かみて抱りみて書ちもしうりう熟ふ
んをひれ〜〜て又由ふ抱ぶと〜〜ふ家ふ抱ちもちもしこ
ちるるりれこんてびをじふ不さやきつぐもた〜〜ハテナ由さんが熟いふ
あやどふいふんぐちとんト言ちんぐ〜〜そりやアわんふ養がゆる
のぐろふぜト言ちんうまるりのあり きく〜〜ナ二まさう私ふ庵〜〜どう

春色四編
唐三郎
おさん

して世間いろぶんの人(一張その方へうけてきたもの)
しらこん方ごろごろ何ともいへぬきく(おく)何程
あんでらを紙に義理のうとるれる式の方ご者へそれ
ごっても今まで方紙あんかのかるゆうお者ぶりと一
向をうってもの時形作もあるんときゆやあまへのう
でるぶらをるもかるれど何も御しれるいはもあ
あんらく呼くるもあ御しあ結ものや間柄の
ゆ一をきるそもかるれどきく一それぐらう那作ろお

云ちかても紙ぐらて由ぶをあやあせんょ何でもおまえ
んわ逢ておをゆーやをくくく大体解るぐらやとふひまし
ふ逢へそくさどくもの由さんの猪ぶ解せあんふまう私のふ
ふのお義ぶ義理をあてちくふくをくをときくるん
くぐらと結切でゆーわ男をきやて逢てゆくく場
あくるんやーわ方くくていふたりぐらやとふるとれう
又私と御せるあかんのまへくる者ろ乃至やあ友方
男をとりて義理づくで御せる者くいふぐまあ

どうちうとしはつてこの歯を今の書とあくんのう山く法
やうふるくもとる孫吟の書らいとうぶるの今く法いかと遠
ぐて田さんをくるふかふ金の子ほねごうくおこうの考
へどうぐぜきくだろしくしくもおくんちかぶたを極
ぐんをくらべ今湯ろまでこ極ふまこ法ふてゐやァまま
せん方くそれでもお歯くいろる変ぐんぐんぐんを
はもおぐくしはうくまるはうねきくうやち歯
さんが安んちかでゐはんくひぐい私の身ゐも加て

おくんちかぐまくくて歯だりうゆんゐ第くふゐ擬
さゐくくしふかてお在のを代でうんてゐる法くきと
はふゐもきそれはもくどんゐでゆりまをうそれも
お歯さんの身をゐくべくくて黙て幸陽くてゐまん
トやァゆりませんうゐんゐどくくまくびはれゐ鬼る
ぐうくトぶるくくと身をふるうくて方ラくのひざく
まくれるくくくくふかなきまくる

第廿四齒

歯ア房は身を何ゐひうん歯ゐ敵色を変て様ゐ

もうれてるお家をも昼く家きやうかう家さうな又
久しぶりで嬉しがつてもよいねへ今まじやア美
家の知りでたのたのもしいなるの成るん家よしてまるい
斯那とちくりをさつぱへだ孤しんやと後ろまやら
小見しくしてあぐもへ家で義合こと喜ひ直ぐの
まぢかしくとちやうぜこグ方ぬやアまうこじんまみまん
ちきへうぶ見ちぶ猫まるの浮家絵まるが宮ちくし形
ちくこうこ家先しまを切ちんかぐちこちも承知

ざうう何もちて繰ぐ少やアなだるへせ今存る卒店へ
何て遠慮お前をもち掛てまだこのみを朝ひでもはち方
うへを巻ちるョ病丈ひらひつうとちやアれつんるん
極へお前の掛合をちつうう繰ひつてあ極へト成りちう
げりはるひおきくいきもを
つぶ男のうほをえうえく
でもお遠ひう家へヲン今まだこと喜ぶ遠ってあく
うもまれ極へは掛ひ繰ひ魅さまて卒店やお帳ひ悪
くうちれ実はるお書ひへ如房ひ喜をもま

せつかく考へまい考へるほど分別が紛へせうごもうら紛
正気になられしやア今までの口から出ませぬの気安め
や独に手紙じやア紛へせぬそれを気から遠くうも紛へ
まんざおめしらぬ紛へるからしまうをせト
○このところもとろこそは丹の手がうつてまぜうて置きねはめんどの手あれども差ぬ
丘士の人の内ゆしよろこぶあきまみ常とひも半いつてもとしさえ
しのかきなぞのうるすてゆうしまて何やするつうなぞきく「そうりやアまア女房
ありもそゆくゆくいふおそれのことばをまへるみ志らう
さんやん気なるへト　たや目をし　あきごつたん　女房「そうさ今しまいじやア異様
さいつくりふ覚ゆふるを幸気すかもく雪の気に成るう

アれから雪ごトつんく向きく「まアもうしこもゆつさいつたり
てうらうあん御店へ気いにそうしお変りなア何を私が悪いと
でもしてお茶さんの所へ泥でも塗さしろ気てえやく
るりのでもゆるのえへ様子ら路しえておき色々の所作
もおつら奥開にりのそなさてまつくやうりにいそぎとく明
白が宜じやあんるサアまアはじめをお向と成トうしろへ静
ふうむけんとなう気そうりえらふきく「アいく〳〵トなむぜし息
爰ニらの待ちえらうをおひどく気がきく事る
もいらへし　動静に　縮伸てゐる外方次第いわん弱く

もうそうへらだと身へさしあたり何ごとも大そうお
病人のおんのとき云掛りうるさいよりそこで宜しいやかりんこち
りんこくぜつ。いろいろのくすりをおくすりを相有乳をおさへて
記をかいて。それじゃ今もどうぞこのあとはやくてもう
先ひとつ私ら弱小姿でお病のごねん。おれさまそれさ
うらやましい便宜をもつてこさいゆるめ。オトそれでおきく。ア
ア。ア。
然とこゝもまたこは日は新春三月不動さま。那ゲイ
て朝晩小弟ごち始ごちしくも雅ごろうこんおか

まさんと来りけてとこあ実なんとこも毫もまこゝに実
就事こうひもあん今さこゝまこゝ二人りの中を考
てお病のち母さんへさまこゝ親でも面目あんまこゝし
こ周果で私こまアトあんいんもも相せまり。ア。ア。何を
ごつこゝこゝてあるこゝこゝ合せもたまこゝりのこゝ考て
周免こまけ小こくもめこゝ已こゝて一生涯婦さんを抱て
あるこゝい極へのかきこゝそうやまる房さんゆんまりこゝ
あんこゝあんかまこゝ極てこゝ就おこゝのおまこゝこゝやあこゝこゝか

[illegible]ものをいふるゆゑ一所よ放ておいでのうちは
やゞ[illegible]のそばに[illegible]第一私の方ばかりを[illegible]せ
しと支だらうりぶ奉ふ放てくぶ今ふ放てるうとを酒
分ろうう金く虫ぐ[illegible]せさのう爰で爰ばかんかんぬ
ぬんきりの変りやうで何はひくんふも稲光ト[illegible]
をきて[illegible]この形しも奉蓋の方い紙お三海ヶ嬢ば揚ふ
て[illegible]ふとるやうふちぐの浮ろりろくふはも
るせりふ

上ろう〳〵[illegible]新なき戯
房〳〵ン何さ又例の傍ら方ゞ傍ふ陰らァきく〳〵どう
きんぐまァ今わかてきん[illegible]おにぐきうれるくト男の
孫ふ[illegible]ふ海ふ[illegible]ふ声ろうり懇歎ふせまるを[illegible]
理ある[illegible]ふ何をきろんぐ〳〵せばも已のロでこ
ぐきくのぐろう孫を[illegible]ふきうれらァチョウろうるせくトひざ[illegible]
きく〳〵ナ[illegible]命ゆくト[illegible]又も[illegible]る奉蓋のせうふ
洞よくどやうい[illegible]のく男いとふ[illegible]上ふ

ろのりやまれ
なれし
雪の言
松葉

まぐ山極小紙うさん何こらくてね
らまつぞいくうんぬん男惜しい
山家の女めふえうらんこがに惜し
紙色ものもひさぐ紙屋
のうぐれ賣
きうくて金作この家へたづ先て来ろふふ
銭面はよく山栗産家ぐ出れて捜して来る由
ひのうぐ女ぐぜきく「そりやア私やア去ろうく
ぐ今中とうりか家の若とぬさんぐ連て来て来
さうくせ房「ヨイ仕事さうあ成いふ山へ十二山家行
さんぐ手紙おとく紙ぬるもの家ッ使きめきく「そん
ろく髪も前も髪ぬさんぐとぬ使前もゆるふふ
吸中とて山去ろう紙角て女ふんやアお
らうんと立ろれば又もきこふ
やるかみとのそろく
「ヨ〻如しや後去ーやかのれかめく
房「どうでも物をふ去ぬ アれト他くまでを強き男

の悪に咲きて〳〵点ゆがり行方にの左敷紙をひき
開て知ぬく知へ

とろり〳〵　きぐつてあつくとろけ出る所

点笑ふる紙お松お菓紙とくて「おまへ〳〵何
而の如ゆゑ〳〵宮めしてるの中蓮中ぐろ〳〵これ奥
源へ何しお来ら旅〳〵ちそれ〳〵ぐ極へト尖ぬけお
紙箱をねうれてお菓ゆんも元ちれば怕驚〳〵して
云ふもあく〳〵ハイ私ト〳〵まく〳〵鍬ふさし也

痍痍〳〵ウンとだろうお外と引込お「ヲヤらの方へど
うちゆぐヨ見お出ぐ〳〵ぐんどのおぐやぐぐ
いませんうち〳〵丑ふお有繁盛ちも云那て呉もし
もどもしてあつ動靜。庭の方ゆて古竹まちる由雨
い悦しく。陸ふ伝開てさ〳〵み人ゆ〳〵ひげ福ぐ房
ニ帝ぐおぐ〳〵く伝ふ向ませ〳〵。水盃の元を病板お
吸てそのまく〳〵お菓を抱さ上口伝剃て水をつぎこと。
髭を動揺る外抱小仲の水をゴクリとし。間へ通りと

猶豫ゞ身と。悔しさと恐しさと。法法る病障か
もとびあらく和くぐ宮ゐもゆ。ゆゆるゆとゆ義ちゆ。
くゆの連中ゆ加ちゆくる。旅深ち恵信と音ゆ比ゆゞお
幕ゆ出幕ゆゆゆとび。比処へ尋孫来て比体をゆて
ゆ驚きゞ。ゆ抱を赤ゆるゞ。ゆても比客髪ゆて。嬉ゆ
仮ち動るまゞと。信頁人ゆ比意病のゆ。ゆ紙書て。申ゆ御
ゞ例の信切。邪魔川の養ゆる。廣原地御ゞ家伯の如来神
妙丸を陥し。又ゆ色ゞゆりゆて。何ゆも私ゞのゆん

でゆるゆゞゆゆるゆまくの方へ歩ゆるゆゆ比場ゆまゆちや
くゆゞ宮ゆゆゆ。ゆゆ義を座ひてゆ義を手巻ゆ
上音ゆゆくゆ加賀ゆゞゆ送ゆて巻て長ねへゆまへ工夫り
やゆゆ次郎の病人へ遠てきんざゆでゆゞへまゆ孫
へゆゆんとゆゆ麗ゞゆゆ。ゆゆゞゆ孫へゆゆを云
てゆるゆ呂ゆゆりんゆゞぜ音へゆけゞゆゞりゆ義ゆゞ
ゆまゆるゆ悔ゆゞ孫ゆゆ辞ゆゆゆん。ゆ破ゆゆと
ゆゆゞゆゆゆゆゆゆ義ゆ。ゆ音へゆイ見ゆまゆ

りちゃくもすくなくそそぐめさそくたんをきりてなま
〻〻を庭の小てふさんろう屋うまく〻由〻浦
草〻〻何をとて〻〻〻〻と〻〻紙を音〻一寸ほど被奏

歌澤大和大掾

章句改正　受領

○まつ月をたゝきて泥の石改正をきてゝろ
○夜るは暮て改ねさく黒ぬりの一本ゝゝ〻ねと架也

○雲の月〻を改　○かくれて筆の光改
○志どゝきく病名さや改　抱て行ゝの
あのどる　改正
○ゆれるぶゝるの名れ抱くゝゝ家ゝ改
○よどむ〻〻〻〻の義て改むもゝぶのかり
まゝ〻〻〻　かと枕改
まのゝ意ち
いまゝゝぶでよゝぶたゝゝの　上下一段
ゝゝよゝ程余遠て改正抱て成ゝゝふ而陸おい文ぐと

順ひ文い

郢曲三昧隆達遺響
歌澤章句新改正所

歌澤紙六斎割正

歌澤小蝶女正作

由へ何ごとおもしろくも猫へきつこんの紙で昨の改正の彼寫
でもの名へ名へいつも花魁ふくろ茶屋名ヲ教むよ五編
ものふび又重ねて言へお月小掛らてどぜんやせうと
そく早寛お業の義兄ふ小帰第五編小英いとべし。物
歌隊の家元が受領を図る年六月のゆゆして三編の下

但しこれ基あるまさに脱小三編を僕橘場の里小国屋の
お小の我案ゆゑ七年以前の出板なれば今更源氏小
なてこそ。看官作者を罪なんぬいて。性嗣編意覚
を希ふのみ

本編作者　梅暮里谷峨　敬白

春色連理梅巻之十二了